①グランドオープン記念セレモニーの参加者全員で記念撮影
②メモリアルトークの様子　③教育旅行の受け入れ

広がる継承への取り組み

引揚記念館グランドオープン2か月の歩み

昭和63年の開館から平和への願いをつないで30年。引揚記念館では、ユネスコ世界記憶遺産に登録された貴重な資料を保存するための収蔵庫や企画絵画展示室、抑留生活体験室を新設し、4月24日にグランドオープンしました。次世代への史実の継承に向けてさらなる取り組みを展開しています。

《引揚記念館》

記念セレモニーに250人

4月24日に行われた開館30周年・グランドオープン記念セレモニーには、引揚体験者や市内の団体・機関、関係者、地元の小・中学生などの幅広い世代約250人が参加。式典後に行われたメモリアルトークでは、シベリアなどからの引揚体験者から「生きることが死ぬよりつらかった」など、極寒の地での強制労働、病気や飢えへの恐怖、劣悪な環境の中での生活など、過酷な抑留体験とともに「戦争は憎いが人は恨んでいない」「戦争の悲惨さ、平和の尊さを命ある限り伝えたい」と、次世代に語り継ぐ思いを話されました。

教育旅行で次世代へ発信

グランドオープン以降、教育旅行として市内外の小・中学校や高校、5校381人が同館を訪れています。シベリアの収容所を再現した抑留生活体験室では、当時の衣服や作業に使用していたスコップなどに触ったり、収容所内のベッドに横になったりして抑留生活を体験し、「薄いコートでどんなに寒かっただろうか」「硬いベッドで寝るのはつらかっただろう」と、当時の状況に共感する姿がありました。また、「2畳分ほどの狭いベッドに6人が頭と足を互い違いにして寝ていた」「助け合って生きるために、少ない食料を手製の天秤ばかりを使って均等に分けており互いが憎しみ合わないようにしていた」など、収容所での抑留者の様子を語り部から聞き、過酷な環境に置かれながらも帰国への希望を失わず生き抜いた抑留者の気持ちに思いを巡らせたり、平和の尊さを考えるきっかけとなっています。

今後も未来が平和であり続けるために、貴重な資料や新しい施設を活用した教育旅行の受け入れを進め、「引き揚げの史実」を若い世代へ継承する取り組みを積極的に進めていきます。

特別企画第2弾　シベリア虜囚抑留体験者　佐藤清氏の回想画展

今回新設した企画絵画展示室では、絵画を通じて理解を深めてもらうため、開館30周年・グランドオープン特別企画の第2弾として「シベリア虜囚　抑留体験者　佐藤清氏の回想画展」を開催。

シベリア抑留の体験記録には、「虜囚」や「囚われ」という言葉が多く使われ、回想画にも囚われの身の気持ちを表現した作品が見られます。遺された作品から絵画に託された思いを感じてください。

【日時】7月7日(土)～9月9日(日)9時～17時（入館は16時30分まで）
【場所】引揚記念館
【内容】デッサンや油彩画など約30点
【料金】無料（別途入館料が必要）
【問い合わせ先】引揚記念館（☎68・0836）へ。

▲虜囚

▲カンボーイにも遠き故郷

引揚記念館
七タイベント ～星に願いを～
【期間】
7月2日(月)～8日(日)

引揚記念館では、平和へのメッセージや願いごとを託した短冊の飾り付けを行う「七タイベント～星に願いを～」を実施。

たくさんの思いを込めた短冊を笹に結び、星に願いを届けます。期間中メッセージを書いた人に記念品を進呈。

《オープニングイベントを開催》
【日時】7月2日(月)10時から
【内容】平保育園児、舞鶴・引揚語りの会、来館者による短冊の飾り付け
【問い合わせ先】引揚記念館（☎68・0836）

まいづる元気人 Vol.55

生きる力と奉仕の心を育む

ボーイスカウト
舞鶴第6団　団委員長
小島 勲 さん

およそ110年前にイギリスで始まったとされるボーイスカウト。キャンプなどの野外活動を通じて若者に日常生活で役立つスキルを身に付けてもらうことを目的に、世界196か国4000万人が活動しています。6月には、ボーイスカウト舞鶴第6団が発団50周年を迎えました。今回は同団の団委員長で、長年にわたりボーイスカウト活動に携わってきた小島勲さんにお話を伺いました。

自然と向き合うことで学ぶ

ボーイスカウトと聞くと、カーキや青の服を着た子ども達がアウトドアなどの活動をしているという漠然としたイメージを持っている人が多いと思います。しかし、キャンプなどの活動をすることが目的ではなく、その活動を通じて生活に必要な技術の習得と奉仕の心を身に付けることがボーイスカウトの活動の目的です。そのため、大人（指導者）は「口は出さず支える」という考え方で、危険がないか見守るなど必要以上に手伝わないようにします。また、子ども達は活動に参加する際の身支度などを全て自分で行うようにしています。生活に必要な技術を身に付けることが目的なので準備からすでに活動の一環ということです。

子ども達は年齢別にカブ隊（小学2～5年生）、ボーイ隊（小学5年生～中学3年生）、ベンチャー隊（中学3年生～高校3年生）と異なる隊に属します。昨年には新たにビーバー隊（年長～小学2年生）を発足。節目の隊員は毎年9月にある上進式で上の隊に所属が変わります。年齢に応じて活動も高度になっていくため、上の隊の隊員は下の隊の子どもにとってあこがれの存在。各年代が合同で行う団行事のときには自分たちがまだやったことのない火を扱う姿などを見て「はやく上の団に進みたい！」と目を輝かせます。

団の活動は例年決まっている年中行事もありますが、年齢が上がってくるとそれ以外にも企画や計画、準備などを自分たちで行うといった経験も積みます。今年の9月15日～17日には青葉山ろく公園で上進式やアウトドアなど盛りだくさんの50周年記念イベントを開催します。このイベントも計画や準備は隊員も携わって団一丸となって準備しているところです。

このようにボーイスカウトの活動は生きるすべを総合的に養うものといえると思います。身に付いた技術や能力はスポーツの上達に比べると地味で実感しにくいものですが、大学進学を機に一人暮らしを始めたという元隊員の子ども達から「団活動で学んだ技術が一人暮らしを始めてからいろいろな場面で役に立った」という声を聞くと、まさにボーイスカウトの活動が実ったと嬉しく思います。

また、キャンプなどの活動は個人の技術だけでなく助け合い協力することが欠かせません。困っている人がいたら助ける奉仕の心を学ぶことも大きな目的です。そのため、風水害などが発生したときに子ども達から先に「何か手伝わないと。できることはないか」と自発的に提案されると、日々の活動が着実に子ども達に学びと成長をもたらしていると実感します。

世代を超えて団の活動を

ボーイスカウトの活動に参加するようになったのは自分の子どもが入団したことがきっかけ。自分も団の活動に協力できないかと思い指導者になりました。指導しているのはOBや経験者だけでなく、講習を受けると指導者になることができます。特に地方では大学進学とともに都会に出て戻ってこないOBが多く、休団になってしまうところもあるのが現状。少子化だけでなく大人の人手不足も問題のひとつです。子ども達が生き生きと活動できるためにも、指導者や保護者がともに力を合わせて活動しています。

今年で舞鶴第6団は50周年を迎えましたが30年以上にわたって活動に関わっていると、昔教えていた子どもが今では指導者として団に参加し、その子どもが隊員として活動に参加してくれているところもあります。このように活動が世代を超えて引き継がれていく姿をみていると60年、70年とこの活動を未来へつないでいきたいと強く思います。

市内には東地区で活動している第6団のほか、中舞鶴には舞鶴第3団が、西舞鶴には舞鶴第4団がそれぞれ活動しています。少しでも気になられたらぜひお住まいの地域の団に問い合わせてください。

▲記念式典の様子（6月2日）